

ドイツの農機ショーで革新技術に出会いました

雨にも負けず

農場のメイン作物のダイコン収穫期となった11月はくる日もくる日も雨。地元にある測候所のデータによれば、月間降水量は364mmで平年の140mmをはるかにしのぎました。これは観測史上第1位の月間雨量とのことでした。

この時期、新聞などによれば西日本はカラカラ天気とのことで、日本海中部に停滞した低気圧の何ともうらめしかったことが。

おかげで、農場の機動部隊である機械たちを思うように活躍させることができました。開墾作業に使用したブルドーザー（D3）さえ、圃場に埋まって動けなくなるほどのパニック的な事態さえ生じたのですから、悪天候のすさまじさがお分かりいただけると思います。

それでも、我々は嘆いてはいられず生き物である農作物を適期に管理しなければなりません。特に、この時期の主作業であるダイコンの掘りとりは、遅れると「す」が入り、使い物にならないだけに、難しいところでした。また、これまでの経験から生育期間中にこれだけ雨が降れば、横溝が入って著しく商品価値が低下する恐れがありました。土が乾いているときは、2台の収穫機で、そして、収穫機の搬入が困難なときは、農婦さん方ががんばってもらい、手作業で掘り取りを決定しました。

その結果、適期収穫を成し遂げることができました。それに加え、横溝症状がほとんどでませんでした。これは、例年よりも面積を25パーセントほど減らして除草などの栽培管理をキメ細かく行ったこと、上層へ伸びやすい品種を用いたこと、

などの技術成果だと思っております。

いかなる不順天候にも打ち勝つ技術こそは、私共農業人にとって大切なことなのです。このケタ外れに雨量の多かった収穫時期を無事通過し、このダイコンに関しては何れながら自分の技術をほめてあげたいと、うぬぼれています。

大豆も収穫期でしたが、晴れ間をぬって持てるコンバインをフル活動し予定どおり終えました。バレイショは掘り取りが終了した後での不順天候でしたから、問題ありませんでした。

しかし、雨に敗北感を味わっている作物もあります。9月に種蒔きを終えた小麦は、初期生育が遅れてやや心配な状況です。

また、11月収穫の無農薬ダイコンの生育もかんばしくありません。例年より2週間ほど遅れて11月下旬に収穫していますが、3000万円ほどの売上を目標んでいたのですが、赤信号です。こうしてみると、不順天候を克服した作物の一方で、まだまだという作物もあって、すべての作物で満点をとる難しさをいやというほど痛感しています。さらなる向上心で作物管理技術を勉強する必要があります。

ダイコンの作付けを抑制した分は、大豆に力点を置いていきます。今年の収量は、約1500俵でした。45haの作付けですから10aでは3・3俵です。物足りない収量です。消費の引き手が強い作物だけに、反収水準を高めながら面積をさらに増やしていきたいと考えています。ただ、水田転作が来年度からさらに強化され、その転換作物として大豆が奨励される可能性が強いだけに、品質面も一層高めて需要者に供給していかねばならないと思っております。

衛星利用機械にあぜん

前号でお知らせしたように、ドイツでの農業機械の展示ショーに行ってきました。

北海道の農業仲間や機械販売店主の方々10人とツアーを組み、11月9日から19日まで10泊11日の行程でした。最初に足を踏み入れたのは海を農地にしたオランダです。せつかくだからということでも250頭のホルスタイン飼育乳牛農家を視察しました。家族経営ですが、飼料の半分は自給するのだという強い意志をもった経営をしているところに農業マンの誇りを感じました。

次の日、北部ドイツの養豚農家を見学しました。この農家の邸宅は極めて古い構えでした。それもそのはず何と600年間、代々農業をしているというのです。最近、3人姉妹の末娘が後を継ぐということを表明したようで、これで伝統を絶やさないですむと、喜んでいたのが印象的でした。この家族も農業に自負をもっていることがうかがわれ、ヨーロッパ農業のたくましさ垣間見ることができました。

畜舎も含めて建物は、総じて古いのですが、農業機械は最先端のものばかりで、それも大変大事に使っているようでした。1基800万円の風力発電機を設置しクリーンエネルギーを取り入れており、羽根が風でダイナミックに回っていました。4日目と5日目目指す機械展示ショーです。正確にはアグリテクニカショーと称し、ヨーロッパ全域のメーカーから農業機械が運び込まれていました。2年に1回開かれているのですが、そのスケールの大きいことにはあぜんとします。

12館で機械展示がなされているのですが、1館が3ha規模ですから、その大きさが想像できるでしょう。農業、畜産だけでなく、林業機械も搬入されています。日本のメーカーから出展がないのが残念です。



上：ドイツのレストランにて（右から2人目が筆者）



下：JF食材・産品フェアにて（右の2人は農場の若手従業員）

ハノーバー市にあるこの会場は、こうした大規模なイベントショーを開設できる展示館が38館もあるのです。農業機械が展示されている以外の26館では別の催しが行われていました。

今回の目的は、肥料散布機とマニユアスプレッターの中間的な機能をもつ散布機の物色です。有機農産物を安定生産するには、鶏糞の投入が必要なのですが、水分を含んでいるため満足に散布できる機械がないのです。トラブルを起こさずに作業効率を高める機械がないか、見て回ったところやはりありました。ドイツアマゾーネ社の多角的散布機が私のねらいにピッタリすることが判明したのです。一回当たりの充填容量は5tですから、効率も悪くないようです。気に入りましたが、問題は価格です。350万円とのこと、さてどうして手に入れるか、大きな投資が続いてきただけに、導入方法が今後の検討課題です。

この展示ショーで驚愕した機械があります。宇宙衛星を使って収量と地力解析をしているコンバ

インです。刈り取りのときに、あたりにコンバイン備え付けのコンピュータで収量解析しておくとともに、衛星通信で刈り取り位置を確認するのです（カーナビゲーションの応用）。これによって、その刈りとした場所の収量が自動的に分かり、収量に応じた地力地図の作成も可能というものです。これをさらに発展させると、コンピュータ制御で地力に応じた肥料散布を自動的に行うことになるのです。

この機械装置は3社で出展していましたが、ただただ感心、驚愕、びつくりした次第です。農業機械もついにここまでできたのかという感慨をもちました。大規模化やコントラクター（機械作業請け負い）の増加により市場規模が膨らむとメーカーは見通しているようですが、我が国の零細な経営規模では、どうかな、という気はしました。一時停滞した感のあった農業機械ですが、このように依然として技術革新の余地はありそうです。我が国のメーカーもがんばってほしいものです。

安いヨーロッパの機械

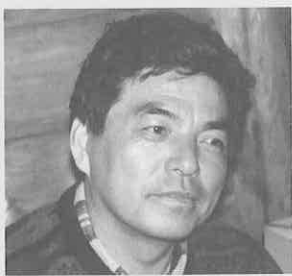
この展示で、我が国の機械との違いを痛感したのは、価格です。我が国で2000万円ほどのコンバインがほぼ同じ仕様で1500万円程度なのです。それに加えて丈夫で長持ちするのがヨーロッパの農業機械です。こうした点も我が国のメーカーには見習ってほしいところです。

ドイツ有数の機械メーカーのクラウス社とフェント社の機械工場を見学し、フェント社では最高時速50km、4輪ブレーキのトラクターに試乗しました。クラウス社はコンバイン主体、またフェント社はドイツ唯一のトラクターメーカーですが、両社とも小さな町に本社をおいており、我が国の会社のように大都市へ進出する気はさらさらないことにドイツ人気質をみる思いでした。ドイツ人

気質といえば、「信用」が根底にあるような気がします。これで5回目のドイツ旅行になるのですが、我々のような外国からの旅行者にさえ、夜遅くなると言えばホテルの玄関のかぎをだまて貸してくれたり、あるいはレンタカーの返却のときには車をいっいちチェックしないことなどにみられるように、ドイツの人達は、他人を信用する民族だということを痛感するのです。この信用こそ資本主義社会では最も大切な行動規範のひとつだけに、ドイツの人達を学ぶ意義はありそうです。今回の旅行を総括すると、やはり衛星通信利用のコンバインの登場が最も心に残っています。と同時に、科学立国、あるいは哲学立国ともいえるようなドイツの気風をさらに強く受け止めたといっても過言ではありません。

話は国内に代わって、本誌でも紹介していますが、日本フードサービス協会（JF）主催の「JF食材・産品フェア」でブースに当農場産品を出展しました。

生のバレイショ、ダイズ、ニンジンに、漬物アイコンです。消費側の動向や、取引先の開拓をねらったものです。このようにして川下側との接点を探っていくことは、これからの農業にとつては重要なことと考えています。つくるだけから、売ることまで含めたトータルな経営展開を図ることこそ、我々が生きていくひとつの道なのです。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立